様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ５ 月 ３１ 日現在

機関番号：１０１０２
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2014～2016
課題番号：２６７７０１６９

研究課題名（和文）素性継承による言語の類型と歴史的変化の研究

研究課題名（英文）A Study of Linguistic Typology and Historical Change

研究代表者
菅野　悟（Kanno, Satoru）

北海道教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：８０５８３４７６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,400,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究では、素性継承の観点から、言語の多様性と歴史的変化を捉え、また、主語の統語的特性を解明することを目的とする。英語では、Cの一致素性と時制素性が下位主要部へと継承されると仮定されている。しかし、本研究では、言語機能はこれ以外のパターンも許すと仮定する。理論的可能性として、英語以外のパターンは次の2つが予測される。(i)フェーズが持つ素性が継承されないパターン、また、(ii)フェーズの持つ素性が別々の主要部に継承されるパターンである。この継承パターンを仮定することにより、上述の目的を達成することを試みる。

研究成果の概要（英文）：This study tries to capture, in terms of the feature inheritance mechanism, typological differences and historical changes among languages, and syntactic properties of subject phrases. It has been assumed that in English, both an Agree feature and a Tense feature of C are passed down onto the lower functional head T. However, this study assumes that the language faculty permits other options than one found in English. As logical possibilities, the following two options are expected to be found: (i) the features of a phase head do not undergo the feature inheritance operation, and (ii) the features of a phase head are passed down onto different heads. This study attempts to achieve the goals raised above in terms of the feature inheritance mechanism.

研究分野：統語論

キーワード：英語学　生成文法　統語論　フェーズ　素性継承　言語類型論

## １．研究開始当初の背景

(1)　本研究は、生成文法の最新の枠組みである極小主義で採用されている素性継承のメカニズムを研究対象とする。

現在の極小主義において統語計算はフェーズを単位として行われると考えられており、フェーズが派生の中心的な役割を果たしていると仮定されている。さらに、このフェーズは素性継承と呼ばれる操作を行っていることが近年明らかになっている。この素性継承の考え方によれば、フェーズが一連の解釈不可能素性を持ち派生に導入され、その後、その素性を下位の主要部に移される。この素性継承が構造構築の際に重要であることが近年指摘されている。このため、素性継承に基づき、様々な言語現象を説明することが重要となる。

このような研究背景のもと、素性継承の観点から言語間の差異や歴史的変化を捉え、さらに、素性継承と関わる主語の統語的諸特性を解明することを目的とし、本研究が行われた。

(2)　この素性継承のメカニズムは英語を観察することにより仮定されたものである。英語では、フェーズ主要部であるＣは解釈不可能素性を持ち派生に導入されるが、実際にこの解釈不可能素性を照合するのはＴである。継承された素性を持つＴが名詞句と一致の関係に入り素性を照合することになる。

(3)　この素性継承が近年提案された時期から研究が進められていたため、研究開始前の段階より、予備研究がなされていた。また、この予備研究を通し、さらなる研究が成されることにより実りある事実、および、理論的な貢献が可能であることが確かめられた。

このような背景があり、本研究の申請がなされた次第である。

## ２．研究の目的

(1)　本研究は、近年の生成文法で採用されている素性継承のメカニズムを採用することにより、言語間の差異、および、言語の歴史的変化を説明することにある。また、素性継承のメカニズムの観点から主語句の統語的特性を明らかにすることである。

近年の研究において、フェーズである主要部Ｃには、一致素性と時制素性が存在し、この素性が素性継承の対象となると仮定されている。また、もう一つの主要部であるｖに関しては、（少なくとも）一致素性が存在していると仮定されている。

この時、英語においては、フェーズ主要部であるＣに存在している一致素性と時制素性、そして、ｖに存在している一致素性は素性継承の操作を受け、下位の語彙範疇主要部であるＴ、および、Ｖに繰り下げられると仮定されてきた。

(2)　しかし、本研究は、言語機能が英語で提示された以外のオプションを許すという可能性があると仮定する。このような仮定は理論的に導けるものである。ある操作がある言語において、義務的に実行される場合であれ、当該の操作がパラメター化されている可能性がある。この点が素性継承にも当てはまり、英語以外の言語では素性継承が実行されない可能性が存在する。さらに、素性継承が実行される場合であれ、英語と同様の方法が採用されているとは限らない。このため、言語ごとに同様の素性継承の方法を採用しているかを詳しく検証する必要がある。

(3)　理論的な可能性として（少なくとも）次の二つのパターンが考えられる。第一に、素性継承が起こらず、一致素性と時制素性の両方がフェーズ主要部に留まる場合である。第二に、一致素性と時制素性が別々の主要部に継承されるというパターンが考えられる。

(4)　本研究の目的は、まず、この説明理論は英語以外の言語であれ、妥当であるかを示すことである。また、一つの言語を観察した場合、歴史的な変化を通じ、同一の素性継承メカニズムが採用されているかどうかを確かめることである。最後に、素性継承のメカニズムの観点から主語句の特性を解明することである。

## ３．研究の方法

(1)　本研究を遂行するためにはいくつかの段階的なアプローチが存在する。第一に、フェーズ主要部からのアプローチである。フェーズ主要部はＣとｖの二つがあると仮定されており、それぞれのフェーズ主要部を分け、研究を行うことが有意義である。この区分に基づき、まずは、ｖを主要部とするフェーズの研究が成され、その次に主要部Ｃへの研究を行った。

(2)　第二の段階は、主要部Ｃの素性継承の研究である。この第二の段階において明確にする必要がある問題は、どのような素性が素性継承の対象となるのかという問題である。また、素性継承が行われた後、Ｔは名詞句と一致の関係に入るが、この時、主語はどのような特性を有するのかという問題が生じる。

これら二つの段階に分けられ、進められた研究成果は以下に示される。

## ４．研究成果

(1)　第一の研究成果として、主要部ｖに対する素性継承に対する研究が挙げられる。Ｃには一致素性と時制素性が存在し、この両素性が素性継承の対象となると広く考えられてきている。一方、ｖに関しては、一致素性があると一般的に仮定されているが、時制素性が存在しないと考えられている。このため、ｖの場合、Ｃの時制素性に対応する素性はど

の素性であるかが不明であり、この点を解明する必要がある。

近年、v および、vP の研究においては、主題役割が統語的な素性であるとする考えが提案されている。この考えに基づけば、フェーズ主要部 v が有する素性は一致素性だけではなく、主題役割素性も持つことになる。この考えが適切であれば、主題役割素性は素性継承の対象となり、素性継承が適用される場合、下位の主要部 V へと移行されることになる。

実際、この考えが適切であり、この研究成果は、雑誌論文④および、⑤にまとめられている。これらの論文では、言語の多様性と言語の変化が素性継承の変化として捉えられることを論じている。

これらの研究論文では、フェーズ主要部である v に焦点を当てている。この v の主題役割は実際に、素性継承の対象であり、また、どの主題役割素性を継承するかは通時的に変化すると主張される。このため、v の持つ素性の継承方法により、言語の変化が捉えられると結論付けられる。

この研究論文で扱われた現象は能格パターンと呼ばれる現象である。通言語的にみると能格パターンは二種類が存在する。一つ目が対格言語に観察される主格目的語構文であり、二つ目が能格言語における能格構文である。どちらの種類であれ、能格パターンと呼ばれ、動作主の主題役割が下位の V へと継承されていると分析することが可能である。この素性継承の結果、主題素性が v に留まり、動作主素性が V へと移される。この素性継承の結果、主題が動作主を束縛する事実、PRO の意味解釈が主題により決定される事実を説明することができる。

さらに、通時的な観点では、この二種類の能格パターンは同じプロセスを経て対格パターンへと変化する。能格パターンが消失するプロセスは、次の三点が挙げられる。第一に、自動詞パターンの他動詞パターンへの一般化であり、第二に、格形態素、あるいは、動詞の一致形態素の磨滅である。第三に、固定した SVO 語順が出現であるが、これは能格構文の消失において必ずしも観察される要因ではない。

このような三つのプロセスはすべて、vP 内部の素性継承の変化の結果であると説明することができる。素性継承の対象となっていたのは、動作主素性であったが、これが変化し、主題素性がその対象となる。この変化を通し、能格パターンは消失すると説明付けられる。

さらに、本論文では、対格パターンから能格パターンの変化に対しも説明を与えることができる。このような変化も同様に、vP 内部の素性継承の変化であると説明することができる。また、このような変化は実際いくつかの言語において生じてきたことを指摘する。

このため、これら論文にみられる研究では、フェーズ主要部である v が持つ素性の継承方法とその変化の研究を通し、言語の多様性と同一言語における言語の変化を適切に取られることができると結論付けることができる。

(2)　本研究におけるさらなる成果として、不定詞節、および、仮定法節における時制特性が挙げられる。フェーズ主要部である C には時制素性が存在すると仮定されているが、不定詞節や仮定法節からの観察を通し、これらの節には時制素性が C に存在しないと結論付けることができる。この研究成果は雑誌論文③にまとめられている。

雑誌論文③では、まず、不定詞節を論じ、あらゆる種類の不定詞節には、時制素性が存在しないことが示される。従来、時制素性の判断は意味解釈に基づき行われていたが、本論文では、有意義な統語上のテストとして、時制の一致現象を用いている。このテストの結果から観察される点は、いかなる不定詞節が介在しても、時制の一致を阻止しないということである。このため、統語上、不定詞節には時制素性が存在しないことが示される。さらに、不定詞節の時制特性はその節を選択する動詞の語彙特性であり、コントロール動詞、繰り上げ動詞の区別とは無関係である。このため、ある特定の主節動詞の場合、その動詞の語彙特性により、不定詞節は未来の解釈を有し、また、時間を示す副詞との共起が可能となる。一方、そのような語彙特性を持たない動詞が主節に生起するのであれば、不定詞節は未来の解釈を持たず、また、時間の副詞との共起が許されない。

また、不定詞節に関しては、主語との一致を示さない。このため、一致素性も存在しないと考えられる。この結果、不定詞節は一致素性も時制素性も存在しない節であることになる。この両素性の欠如は、不定詞節の統語上の振る舞いとも関係する。不定詞節が統語上の透明性の効果を示す理由は両素性が欠如しているためであると結論付けられる。

さらに、本論文では、従来、統語操作による時制判断があまりされてこなかった仮定法節にも同様の時制の一致操作のテストを適応している。

仮定法節は法に対し屈折しているため、形態論的には定形節であるが、一方、統語操作に対しては、不定詞節と同様に透明性の効果を示す。このような特性はフェーズ主要部である C の持つ素性から説明される。仮定法節の C には時制素性が存在しないが、一致素性は存在すると考えることにより、仮定法節の特性を説明することができる。言い換えれば、一致素性が存在するため、仮定法節の動詞は法に対し屈折するが、一方、時制素性が欠如していることが原因となり、統語上の透明性の効果を示すと結論付けることができる。

また、ここでの議論は従来の研究とは異な

る予測をする。従来、VP 削除はコントロール補部節には適応可能であり、一方、繰り上げ補部節には不可能であると言われてきた。そして、その原因として、両不定詞節の時制特性の違いに還元できるとされてきた。しかし、本研究では、あらゆる不定詞節には時制特性がないことを示している。このため、従来の研究とは異なり、時制特性と VP 削除は関連性がないと予測する。実際この予測通り、あらゆる不定詞節、また、仮定法節において、VP 削除は可能であり、VP 削除の適応不可能性は、時制素性の欠如ではなく、他の要因が関係していると結論付けられる。

従来まで、あらゆる種類の C には時制素性と一致素性が存在すると仮定されてきた。しかし、本研究では、顕在的な C が存在する場合であれ、どちらかの素性が欠如することがあり、その結果、定形節とは異なり、統語上の透明性を示すことが明らかとなる。この研究はフェーズ主要部である C の特性を明らかにするという意味において、重要な貢献であると言える。

(3)　本研究における成果として、主語の特性に関する研究が挙げられる。フェーズ主要部である C が持つ素性は素性継承を受け、T へと移される。その後、主要部 T と名詞句が関係づけられるが、その関係付けが形成される際に、どのような仕組みが関与しているかを解明する必要がある。

まず、前提として、近年の生成文法理論においては、併合操作により構造構築が成されると仮定されているが、2000 年代に入り、一致操作も統語上の重要な操作であると考えられるようになる。このため、名詞句、特に、主語が、移動操作により T と関係付けられるのか、もしくは、一致操作による関係であるのか、という二種が存在することになる。このように、現在の極小主義において、非局所的な関係性を捉えるため、この二種の操作が仮定されており、同じ位置に生起している要素であれ、この二種類のうち、いずれの操作が使われているかを決定する必要がある。また、どちらの操作が関与しているかにより異なる振る舞いをすることが予測される。実際に主語の特性を観察することにより、この予測が適切であると結論付けることが出来る。この研究成果は学会発表③でなされ、図書①にまとめられている。

まず、A 位置に存在する要素が、強名詞句であるか、弱名詞句であるかにより異なる振る舞いをすると論じる。この意味解釈による生起位置の違いは先行研究でも指摘されていたが、ここでまとめられた研究の成果として、いわゆる元位置に対しどのような要素が存在するかを解明することにある。移動操作が駆動されるのであれば、元位置には従来想定されているように、主語の名詞句のコピーが存在する。しかし、一致操作が駆動する場合、元位置には pro が存在する。この pro は作用域や再構築の対象とはならないため、どちらの操作が関与するかに応じ、主語の名詞句が異なる振る舞いをすることになる。

さらに、本研究では、wh 句に対しても同様の現象が観察されると予測され、実際、この予測が適切であると結論付けられる。wh 句が談話連結されている場合、移動操作ではなく、一致操作により、元位置と関係づけられる。その時、元位置に存在するのは pro であり、この場合、A 移動と同様に、作用域、および、再構築の対象とはならない。このように、A’位置に存在する要素が指示性・談話連結性に応じ、異なる振る舞いをすることを示した。

さらに、この研究での重要な帰結は、A 移動と A’移動の統一的分析にある。従来、A 移動と A’移動は別々に分析されることがあったが、本研究の貢献として、両移動において、意味解釈と関係づけられる操作の相関関係が示される。この点において、両移動とも統一的に分析することが可能であると結論付けることが出来る。

(4)　本研究の成果として、ラベル理論に対する貢献が挙げられる。近年の研究において、素性継承を受けた素性は主語の名詞句と素性共有をし、共有された素性がラベルになると提案されている。

このようなラベルに対する考えに対して、解くべき問題が生じる。第一に、素性共有の対象となる素性は何か、第二に、その素性を持つ主要部は何かというものである。

ラベルに対する考えは大部分（標準）英語に基づき提案された考えである。そのため、この二つの問題を多くの言語を通して解明する必要がある。

この問題は図書②において取り組まれ、ラベルに対する言語間の相違を説明している。ラベルに対する言語間の相違が存在することは、フェーズ主要部であるCからTへ継承される素性が異なるためであると結論付けることが出来る。

ラベルに対する研究では、初めに、実際の例として標準英語及び英語諸方言が論じられている。標準英語において、Tと素性共有をしている素性は［＋特定性］を示す素性である。近年の研究において、主語は、その意味解釈により異なる位置を占めると考えられ、この考えは広く受け入れられている。特定的な意味を持つ主語は構造上、上位の位置を占め、この意味を持たない主語は下位の位置を占めると考えられている。このため、上位の主語に関しては、Tとの素性共有の対象となるのは、一般的に仮定されているφ素性ではなく、特定性の素性であると結論付けられる。この結果、CからTへの素性継承の対象となる素性は特定性の素性であるといえる。

これに対し、英語の方言であるベルファスト英語では、主語の名詞句と素性共有されるのは、格素性である。このため、英語のベル

ファスト方言においては、格素性が素性継承されることになる。また、この時、格素性を持つ主要部はAgrとなる。また、別の方言である黒人英語においては、φ素性による一致現象が存在せず、また、主格が素性共有の対象となっている可能性も排除される。このため、非顕在的なφ素性が空のTを素性共有すると考えられる。また、アパラチア英語では、人称素性とTが素性共有をし、バッキー英語では数と人称素性が素性共有をすると結論付けられる。

以上のように、素性共有の対象となる素性とそれを有する主要部に関して、それぞれ大きく二つに分けられる。まず、対象となる素性の点では、意味素性を用いるか、統語素性を用いるかで二分される。一方、その素性を持つ主要部の点では、複数の主要部を考慮する必要があるものと単一のTPのみが機能しているものに二分される。

これらの結果は、素性共有の対象は言語ごとに異なる可能性を示すものであり、この結果、本研究の大きなテーマである素性継承も言語ごとに異なると結論付けられる。

(5)　本研究の結果として、主語句内部からの抜き出しに関する研究が挙げられる。従来の研究においては、主語句内部からの抜き出しは不可能であるといわれてきた。可能となっている場合は、動詞が非対格動詞であるか、もしくは、受動動詞であることが主張されてきた。このため、動詞が能動他動詞である場合、主語句内部からの抜き出しが不可能であると論じられてきた。

従来より、主語句が TP 指定部へ移動した後、必要である素性が照合され、その結果、主語句が不活性となると考えられてきた。このため、不活性化条件により、主語内部からの移動が妨げられるという説明がされてきた。

しかし、いくつかの先行研究において、主語句が動名詞節である場合、抜き出しが容易であることが報告されている。このような報告をする研究においては、多くの場合、文処理の観点から説明がなされ、wh 句とその空所の距離が遠い場合、容認性が上がると言われている。

しかし、このような文処理の観点からの説明には二つの問題を指摘することができる。第一に、wh 句と空所の距離が近い場合であれ、抜き出しが可能である事例が存在する。第二に、動名詞節の主語の抜き出しを容認する話者がいる点である。この場合、wh 句と空所の距離が接近することになるが、文法文であるため、文処理の観点から説明することができない。

本論文では、このような抜き出しに関わる要因として二つを提示する。第一に、wh 句の意味解釈である。wh 句が談話連結されている場合、空所との距離が近い場合であれ、高い文法性を示す。wh 句の意味解釈の研究において、wh 句はその意味内容に関し、段階性を示すことが指摘されてきた。文脈上、答えが制限されている wh 句を談話連結されていると言い、このような wh 句であれば、主語句内部からの抜き出しが可能となる。

また、wh 句の意味解釈が関与するという考えにより、話者による文法性のばらつきを説明することができる。従来の研究から主語句内部からの抜き出しに関しては、話者の間に文法性の判断に関する揺れがあることが指摘される。また、主語句内部からの抜き出しは弱い統語的飽和効果を示すことが観察されている。これらの点は、wh 句の意味解釈がかかわると考えることにより説明される。つまり、wh 句の談話連結性が高くなれば、文法性が上がるが、談話連結性は文脈に依存するため、話者により文法性の判断が異なると説明される。また、同一話者であれ、想定する文脈が異なる場合は、同一の文であれ、異なる判断をする場合があると説明することが出来る。

第二の要因として埋め込みの有無が挙げられる。動名詞節の主語を抜き出す場合、wh 句とその空所の距離が極端に近くなる。このような場合、動名詞節自体が埋め込み節内部に存在する場合は、高い文法性の判断が得られる。

この事実に対し、本論文では、埋め込み節が存在する場合、wh句の談話連結性を強くすると主張した。これにより動名詞節の主語の抜き出しが認可される。ただし、埋め込み節の存在自体では、wh句の談話連結的解釈を生み出すことが出来ず、埋め込み節の存在は補助的な役割を果たしていると考えられる。

さらに、本論文の説明が従来まで提示されてきた言語事実に対しても適応できることを示している。例えば、先行研究において、小節内や使役補部節の主語内部からの抜き出しが可能であることが指摘されている。このような言語事実を詳細に分析すると二つの要因、すなわち、wh句の談話連結性と埋め込みの有無が関与していることがわかる。このため、本論文で示された分析が、従来までに提示された言語事実に対しても適切であると結論付けられる。

このように、本研究に対する成果として主語の特性の解明を上げることができる。主語は、素性継承された素性を持つTと一致の関係に入るが、この一致の関係語であれ、抜き出し可能な領域となる可能性があることを示している。この可能性は従来までの研究ではあまり指摘されてこなかった可能性であり、本研究の大きな成果といえる。

## ５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　５件）


①　<u>菅野　悟</u>、“Extraction out of Gerundive

Subject," *Studies in English Linguistics and Literature*、査読あり、vol. 26、2016、51-76

② 菅野　悟、Review: Phase Theory: An Introduction 、 *Studies in English Literature*、査読あり、vol. 93、2016、195-205.

③ 菅野　悟、Tense of Infinitival and Subjunctive Clauses、*Explorations in English Linguistics*、査読あり、vol. 29、2015、29-62

④ 菅野　悟、Diachronic Changes between Accusative and Ergative Languages、北海道教育大学紀要・人文科学編、査読なし、第 66 巻、1 号、2015 年、63-77

⑤ 菅野　悟、能格パタンの消失、北海道教育大学紀要・人文科学編、査読なし、第 65 巻、1 号、2014 年、119-128

〔学会発表〕（計　3 件）

① 菅野　悟、目的語主格構文と能格構文の平行性、日本言語学会第 152 回大会、2016 年 6 月 25 日、慶應義塾大学三田キャンパス、東京、港区

② 菅野　悟、Extraction out of Subject and Theta Roles、北海道理論言語学研究会第 8 回大会、2016 年 3 月 6 日、旭川医科大学、北海道、旭川市

③ 菅野　悟、外項の統語位置に関して、日本英文学会東北支部第 70 回大会・シンポジウム「言語計算の効率性を巡って」、2015 年 11 月 8 日、宮城学院女子大学、宮城県、仙台市

〔図書〕（計　2 件）

① 菊地　朗・秋　孝道・鈴木　亨・富沢直人・山岸達弥・北田伸一（編）、研究社、言語学の現在を知る 26 考、2016、「一致操作の観点からの「移動」現象再考」、69-80

② 渋谷和郎・野村忠夫・土居　峻（編）、DTP 出版、英語と文学、教育の視座、2015 年、「素性共有と主語の位置に関して」204-216

〔産業財産権〕

○出願状況（計　0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
なし

６．研究組織
(1)研究代表者
菅野　悟（KANNO Satoru）
北海道教育大学・教育学部・准教授
研究者番号：
80583476

(2)研究分担者
(　　)
なし
研究者番号：

(3)連携研究者
(　　)

研究者番号：

(4)研究協力者
(　　)